観光客の視点に立った歴史都市における地域防災に関する研究
（その１：京都市清水寺周辺地域における観光行動に関する調査）
A Study on Community-Based Disaster Mitigation at Historical City from The View of Tourists (Part. 1: ASurvey on Sightseeing Behaviourat Areas around Kiyomizu-Temple)

崔青林[1]，○朴ジョンヨン[2]，谷口仁士[1]，鐘ヶ江秀彦[3]，伊津野和行[4]，関谷諒[5]，安井裕直[6]
Qing-Lin CUI[1], Jungyoung PARK[2], Hitoshi TANIGUCHI[1], Hidehiko KANEGAE[3], Kazuyuki IZUNO[4], Ryo SEKIYA[5] and Hirotada YASUI[6]

[1]立命館大学歴史都市防災研究センター
Research Center for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University
[2]立命館大学大学院理工学研究科博士後期課程
Graduate School of Science and Engineerring, Ritsumeikan University
[3] 立命館大学政策学部
College of Policy Science, Ritsumeikan University
[4] 立命館大学理工学部都市システム工学科
Department of Civil Engineering, Ritsumeikan University
[5] 立命館大学政策科学研究科博士前期課程
Department of Civil Engineering, Ritsumeikan University
[6] 日本ミクニヤ株式会社
Mikuniya Corporation

For Japanese national benefit, "Kanko-Rikkoku" (Tourism-based Country Promotion) is a significant keyword, In recent years, large-scale natural disasters occurred in a number of sightseeing sites and damaged a lot of tourists all over the world. This study tries to promote sustainability of community planning to mitigate disaster through increase of tourist attractions by activities to protect tourists. To protect tourists efficiently, it is required to analyse tourists behaviour. Therefore, a survey was conducted to grasp tourists behaviour at areas around Kiyomizu-Temple as a case. This part summarizes survey conducted at case area and results of it.

Keywords *: Tourists, Sightseeing Behavior, Disaster Mitigation, Historical City, Community Planning*

１．はじめに

世界の観光客数は 2010 年の 10 億人から 2020 年には 16 億人と伸び、確実に「右上がり」になると予測されている [1)]。まちづくりに取り巻く環境への考慮や今後の日本の国益を考えても、技術立国と並んで、観光立国も重要なキーワードになる。歴史的な建造物、有形・無形文化遺産を多数現存する歴史的観光都市の役割は益々大事になるだろう。しかし京都の観光客数の経年変化 [2)]を見ればわかるように、観光産業が確実に成長している産業であると同時に経済情勢・自然災害・ウィルスなどの様々なリスクに強く影響されるのである。特に近年では、大規模な自然災害が世界各地で発生し、多くの文化遺産や周辺地域の人々が深刻な被害を受けていた。都市や地域としてのサステイナビリティを考えた場合、観光資源としての文化遺産をいかに守っていくことができるかという視点も極めて重要である。自然災害から、人類共通の資源である文化遺産を守ると同時に、最大限な努力で尊い人命を守ることも我々の使命である。しかし、歴史的観光地域では観光客を守る取組みは依然と貧弱なものだと言わざるを得ない。

世間は観光客を地理不自由などの理由で災害弱者として認識しながらも、災害を想定した観光客の実態調査は思うほど進んでいないことが現状である。観光客にとっては、最も恐れていたことは観光の最中に災害に巻き込まれることではないだろうか。観光客を安心して観光できる防災まちづくりを推進するために、災害時の初期対応に深く影響することは何なのかについて明確にする必要がある。我々のグループは歴史的観光地域での観光客を研究事例とし、観光客の視点に立った、災害を想定した観光客の実態を把握することから取り込むことにした。特に観光客サイドでの初期対応への影響事項を明らかにするために、観光客の属性、観光形態、防災意識と災害時における意思決定プロセスに項目分けをして詳しく調べることにした。まず、（その 1）では京都市清水寺周辺の観光客の全体像（観光客の属性・観光形態）に関するアンケート調査の結果について紹介する。同様に（そ

の 2）では地震災害を想定した防災意識・意思決定プロセスに関するアンケート調査の結果を紹介する。

２．調査エリアの概況とアンケート調査の概要

(1) 京都市東山区観光地域の概況

本稿では京都市内訪問地（図 1）として長年一位をキープした清水寺の周辺地域を対象に、観光客に対する実態調査を行った。清水寺は京都市東山区の歴史的観光地域に位置し、昼間であれば、現地の住民よりも観光客の方が多い。ちなみに京都市東山区の住民は 2010 年 09 月 01 日現在、39868 人（男性：16827 人、女性：23041 人）、20488 世帯から構成されている [3)]。

東山区の歴史的観光地域は東西を東山連峰と東大路道に挟まれ，北は概ね四条通，南は五条通り（東海道）を区域としている。観光地域の東部は森林地域、西部の東大路通と鴨川の間は商業地域と隣接する。東山区基本計画まちづくり計画図と照らし合わせると、ほぼ全域が車を気にせず、歩いて楽しめ「歩行者安心エリア」に設定している。清水寺から円山公園までの地域の一部は三寧坂伝統的建造物群保存地区として国の認定を受けている。

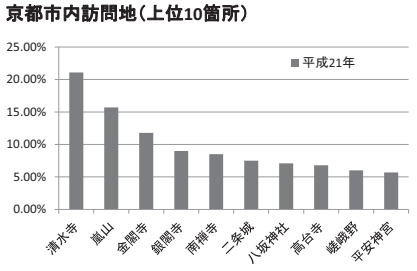

図 1：京都市内の訪問地（上位 10 か所）[2)]

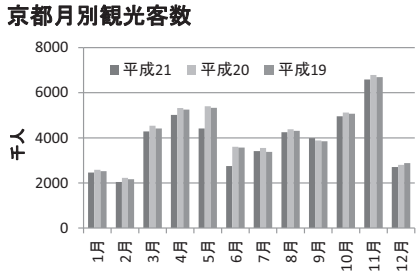

図 2：京都の月別観光客数 [2)]

(2) アンケート調査の概要

アンケート調査は過去の観光客数統計（図 2）を参考し、観光客数が最も多い時期（11 月）に行われた。アンケートは三つの部分から構成される。調査票 pg. 1 ではおもに年齢、職業、住所、観光目的など観光客属性・観光行動および印象評価を問う内容である。pg. 2 では観光している最中に大規模地震災害が発生した想定で、初期対応などの防災意識と意思決定プロセスを問う内容である。pg. 3 では清水寺および隣接する歴史的観光名所を含めた当日の観光順序および訪れた施設の種類を問う質問欄と自由記入欄（来訪施設の記入シートと観光経路記入地図に訪問施設および観光経路を記入するもの）である。調査票の配布は平成 22 年 11 月 13 日（土曜日）の 9 時から 14 時まで、清水寺周辺の各主要な参拝道で行った。今回は調査票を無作為に配り、郵送で回答票を回収する方式を取った。回答は一日の観光を済ませてから、自宅やホテルに戻られた後 pg. 1~3 の順番で行うように回答者にお願いした。全部で 1000 部の調査票を観光者に配布し、98 票（9.8%）を回収した。なお本稿の内容である pg. 1 の有効回答が 98 票だった。

３．集計結果にみる回答者の属性

表 1 に調査回答者の属性を示す。女性が 7 割近くをしめ、50 代が最も多い。会社員（30.6%）をはじめ、通勤または通学している方が全体の 74.5%である。回答者の住所を見ると京都市東山区に住まれる方が 0 人、京都府内合計で 12.3%で、京都府以外では 87.7%である。また職場・学校の所在地が必ずしも住所と同じであるとは限らないが異なる割合が低い。清水周辺への観光頻度は数年に 1 回の方が 42.0%で最も多く、次に多いのは年に 1 回以上訪れる方で 26.5%である。10 年以上訪れていない方と初めて来られる方で全体の 3 割に占める。回答者のグループ構成人数では 2～5 人の構成グループが 71.6%、11～50 人のグループが 11.2%、1 人で来る観光客が 6.1%、50 人を超えるグループが 4%である。清水寺周辺地域での滞在時間は 1 時間以上 2 時間までは 36.7%で最も多く、2 時間以上 3 時間までは 21.4%となっている。

表 1：　回答者属性

回答者個人属性		サンプル数	割合（%）
全体		98	100.0
性別（N＝98）	男性	30	31.0
	女性	68	69.0
年齢（N＝98）	22歳以下	2	2.0
	23~29歳	6	6.1
	30代	18	18.4
	40代	18	18.4
	50代	29	29.7
	60代	17	17.3
	70代	7	7.1
	80代以上	1	1.0
職業（N＝98）	会社員	30	30.6
	自営業	7	7.1
	公務員	12	12.2
	専業主婦	14	14.3
	アルバイト・パートタイム	13	13.3
	学生	3	3.1
	無職	11	11.2
	その他	8	8.2
住所（N＝98）	京都市東山区	0	0.0
	京都市内	8	8.2
	京都府内	4	4.1
	京都府外	86	87.7
清水寺への頻度頻度（N＝98）	ほぼ毎日	0	0.0
	週1回以上	1	1.0
	月1回以上	1	1.0
	年1回以上	26	26.5
	数年に1回	41	42.0
	10年以上訪れていない	22	22.4
	初めて	7	7.1
グループ人数（N＝98）	1人	6	6.1
	2～5人	70	71.6
	6人～10人	7	7.1
	11～50人	11	11.2
	51～100人	2	2.0
	101人以上	2	2.0
清水寺周辺での滞在時間（N＝98）	1時間まで	14	14.3
	1時間以上2時間まで	36	36.7
	2時間以上3時間まで	21	21.4
	3時間以上4時間まで	14	14.3
	4時間以上5時間まで	4	4.1
	5時間以上	9	9.2

４．対象エリアにおける観光行動の実態

本章では歴史的観光地域における地域防災のために対象エリアにおける観光行動に関する調査結果について紹介する。

a. 清水寺周辺地区の観光行動（複数回答）

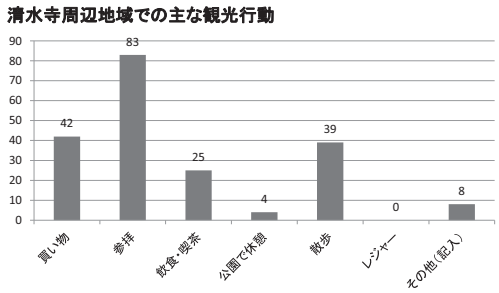

図 3：清水周辺への観光行動

清水寺周辺地区に訪れた観光客の主な観光行動について伺った結果を図３に示す。参拝が一番高く８割以上の回答率である。参拝のみの方は約４割近くいることがわかる。残りの参拝者（4 割）は参拝のついでに、買い物、飲食・喫茶など他の行動も行った。また、参拝を主要目的ではない方も約１割強だった。その他の記入欄では、慰霊供養の法要、写真撮影、舞子に変身、紅葉、観光ガイドとしての仕事があった。

b. 観光予算および可能な支払い方法

事前に観光予算を決めたかの質問に対し、24.5%の方が事前に決めていた。観光予算が決めていた方の中には45.8%が1万円以内であった（図4）。実際の消費状況と予算額の比較（図5）では、40%の方が予算より安く済ませた。ほぼ同額だった52%を合わせれば、予算以内に済ませたのが92%と高く、予算を事前に決めていた方ではその抑制機能がきちんと働くことが分かった。なお予算記入額の平均値は25130円だった。また、図6に本日の観光消費では支払える方法（現金、デジタル貨幣）についての結果をまとめた。両方の方が65.0%、現金のみの方が30.6%で、現金は所持している方が全体の95.6%に上る。デジタル貨幣のみと両方が持っていないケースが少ないながら、存在した。デジタル貨幣の利便性などで、今後も消費方式に大きく影響するであろう。所持する現金量および災害時の金融システムの脆弱性は歴史的観光地域に起きる大規模災害に巻き込まれた観光客への影響について今後の観光地防災の課題になるだろう。

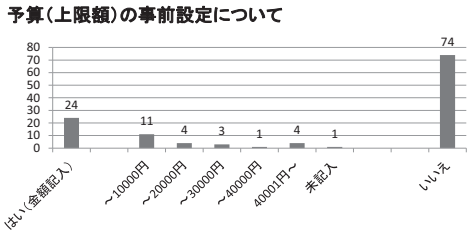

図4：観光消費の予算額

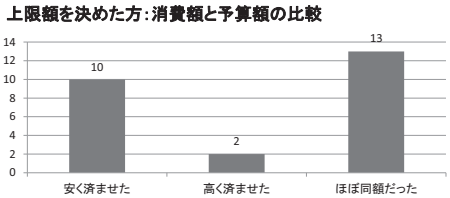

図5：消費額と予算上限の比較

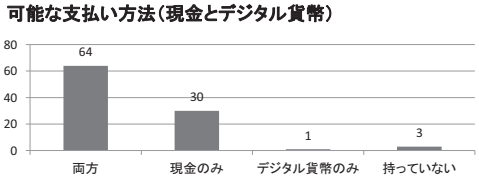

図6：消費行動において可能な支払い方法

c. グループの構成およびグループの行動パタン

アンケートでは交通手段などの選択に影響する構成人数を考慮して、1人、2～5人、6～10人、11～50人、51～100人、100人以上の分割で結果（図7）を集計した。結果を見てみると、2～5人が最も多く全体の72%である。11～50人は全体の11%で、二番目に多い。6～10人（7%）、1人(6%)に続いて51人以上のグループも4%となっている。

グループの構成メンバーとの関係について図8にまとめた。1人の場合を除き、グループ内メンバーが自分との関係を聞くと親・子・兄弟（35.9%）、夫婦・恋人（34.8%）、友達（24.5%）、同僚（9.8%）となっている。また、その他の記入にはツアーの参加者、修学旅行、会社の社員、会社の役員、お客さまがあった。

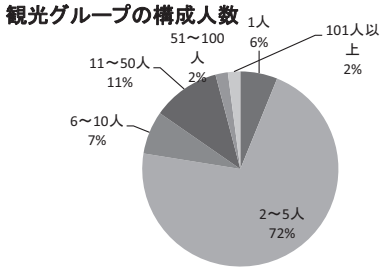

図7：グループの構成人数

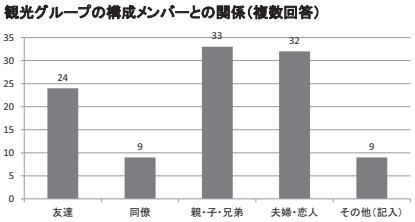

図8：構成メンバーとの関係

自分のグループメンバーとは観光の途中で離れたりしたか？について質問（図9）では、ずっとグループメンバーと一緒だった方が全体の69.4%で、離れたがまた合流したとの回答は22.4%である。離れて全く別行動をしたほうも3%程度である。

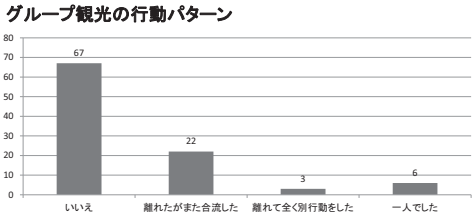

図9：グループ観光での行動パターン

d. 事前の情報収集

図10の結果をその他記入分も含めて分類してまとめると、自分が観光地の地理に熟知している方が3.1%、何らかの形で情報の下調べや整理を行った方の合計は53%、観光団体や他のグループメンバーに任せた方が13.2%、情報の下調べや整理をしていない方が30.7%である。

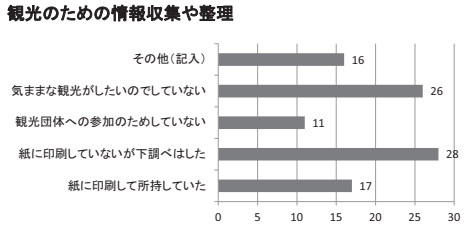

図10：観光前の情報整理

e. 観光経路の設定および変更

あらかじめ観光経路を設定したかの質問（図11）に対して、設定したと答えるほうは58.2%である。そのうち、予定経路通りに観光したグループは76%、予定経路より長くなった方が14%で、予定よりも短縮したと答える方が10%である。予定経路を変更した場合の変更理由について聞くと時間の問題が63%でもっとも多く、道に迷っ

たほうが11%、混んでいたのが3%、他に見たいところがあったのが2%だった。（図12）

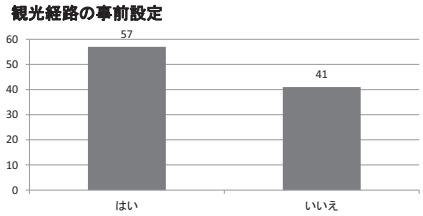

図11：観光経路の設定

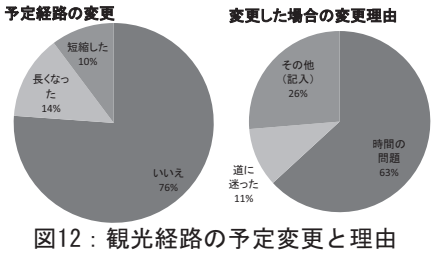

図12：観光経路の予定変更と理由

f. 対象地域に着目した場合の交通手段

清水寺に来る前と清水寺周辺を離れた時に使用した交通手段の組み合わせについて図13、14に示す。電車、路線バス、自家用車の回答率が高いことがわかる。

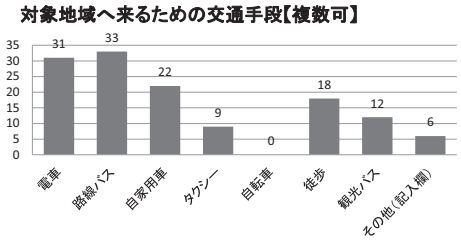

図13：対象地域へ来るための交通手段

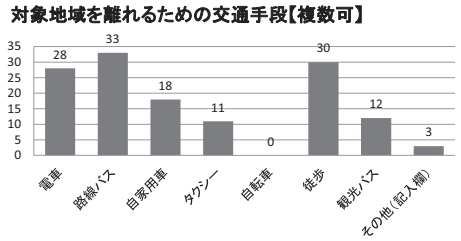

図14：対象地域を離れるための交通手段

一日の観光活動に着目した場合、来るときと離れるときの交通手段の組み合わせが必ずしも対称的（来るときと離れるときが同じであることを指す）ではない。それは当日の予定・または交通手段の性質によるものだと推測できる。来る前の用事、離れた後の用事などによって、観光客が自由に選択することが可能なので、結果的に交通手段の非対称性につながった。交通手段が対象エリアでの災害発生時の行動パターンへの影響についても考える必要がある。

g. 清水寺周辺の観光評価と観光まちづくりへ要望

清水寺周辺の観光評価について、観光の用件・新しい発見や驚き・安全・安心・総合的評価に分けて聞いてみた。図15の示す通り、全項目には高い満足度を得られていることが分かる。

観光まちづくりへの要望の自由記述欄では31人の記入があった。要望や意見のポイントを整理したら、6分類にまとめられる（図16）。なお要望には複数のポイントを言及した場合があるため、ポイントの合計は31を超えた。最も多いのが歩行者の危険性に関する要望で、坂もあって道も狭く、大型観光バスの進入などが原因となっているようである。その次には年配者・不自由な方・外国人への配慮に関する要望で、そのほか案内板やマップ、インフラ・設備の整備歴史的町並み・美しさの温存などがあった。観光まちづくりへの要望にもかかわらず、歩行者の危険性が多く言及されるほど深刻な歩行環境では、災害の場合にはうまく機能するとは考えにくい。現状を解消する方策が求められる。

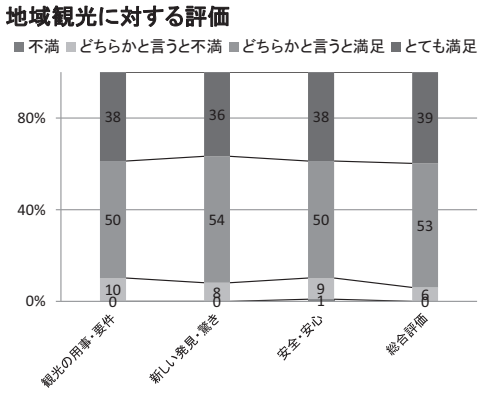

図 15：対象エリアでの観光活動に対する評価

要望や意見の要点集計

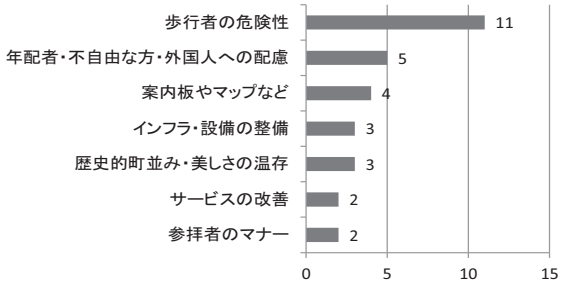

図 16：観光まちづくりへの要望・意見

5. おわりに

本稿では歴史的観光地の地域防災の一環として、対象エリアの観光客の観光行動について、アンケート調査を行い、対象エリアの観光行動の実態を把握することができた。また、結果をみる限り、観光業の発展だけでなく観光客を自然災害から守る観点からでも通常の観光行動をより詳細に把握・分析する必要があることが分かった。

謝辞

本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)「災害弱者の視点に立った減災システムと防災ユニバーサルデザインの開発」[課題番号：22310114] の支援を受けた。また、アンケート調査は立命館大学歴史都市防災研究センター第二プロジェクト室および立命館大学理工学部耐震工学研究室の方々の協力を得て実施した。深謝の意を表したい。

参考文献

1) 山上　徹：観光の京都論、学文社、2002
2) 京都市産業観光局：平成21年の京都市観光調査の結果について、京都市観光調査年報、2010年7月20
3) 平成17年国勢調査
4) 京都市東山区役所：東山・まち・みらい計画2020 東山区基本計画　平成23年3月